
私達の部屋

羽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私達の部屋

【Nコード】

N3144W

【作者名】

羽月

【あらすじ】

やっとの思いで叶った一人暮らしのはずだったのに……。マシヨンの部屋に着くとそこには知らない男が……。どうして、この人と一緒に暮さなければいけないの！？

01（前書き）

賃貸関係の内容が出てきますが、あくまで私の想像範囲内の事です。間違ったことも書かれていると思いますが、そこは話の都合として見ていただけると幸いです！

待ちに待った引越しの日！

やっと一人暮らしが出来ると思ったはずなのに……。

「出ていけ！」

私の荷物が玄関の外に放り投げられる。

「ま、待って下さい！！ここは私の家です！！」

それでも食いつく私に扉の向こうにいる男は訝しげな顔をする。

「……何を言っている。ここは今日から俺の家だ。どこかと間違えているんだろう？さっさと確認して出て行ってくれ！」

確認なんてもう何回もした。

間違いなくここは今日から私が住むはずの部屋なのだ。

「だから！さっきから言っているじゃないですか！私はこの305に住む契約なんです！ほら！契約書だってあります！！」

放り投げられたカバンから部屋を借りた時の契約書を取り出した。

「……何を馬鹿な事を！」

その男は私が突き出した書類を奪い取ったかと思うと書類に目を通す。

すると、男の顔は更に険しくなっていく。

「……どういう事だ？確かにここになっている……」

ぼそりとつぶやく男にそれ見た事かと私は得意げになる。

「どうです！私の言っている事が正しいと解りましたか？でしたら、さっさとこの部屋から出て行って下さい！」

その言葉に男は契約書を私に押し付けると部屋の中へ入って行った。その行動に腹を立てた私は、玄関に入り大きな声を上げる。

「ちょっと！！勝手に人の部屋に入らないでよ！！！」

さすがに見ず知らずの男がいる部屋の中までは入る気になれない。とにかく、あの勘違い男をこの部屋から追い出す事が何よりも優先事項だ。

なんて、思っていたら男は書類をもってまた私の前へとやってきた。

「ほら。見てみる！」

そういつて持っていた書類を私に押し付ける。

「……………どういう事？」

押し付けられた書類に目をやると、それは先程私が渡した契約書と

全く同じものだった。

「・・・2重契約って事だろう。とにかく管理人に話を聞きに行く」

そういうと男は自分の靴を履き玄関を出て行った。

扉が閉まる音に私もハッとして慌てて後を追った。

「ま、まって!!」

私の声が聞こえない訳でもないだろうに、男は止まる気配もみせずエントランスへと向かう。

このマンションは管理人在中のマンションだ。

女の一人暮らしには管理人さんがいる事にとっても安心していた。

それが、まさかいきなりトラブルに見舞われるなど思ってもいなかった。

「・・・留守みたいだな」

やっと追いついたかと思うと、まさかの管理人不在。

おいおい、管理人さん、一体仕事を放棄してどこに行っているのよ。

「・・・どうするんですか？」

管理人がいない事には話が聞けない。

そう思っていたら、男は睨むように私を見下ろした。

「・・・お前、自分で考えようとは思わないのか」

そう言われても、管理人がいないのではどうしようもないじゃないか。

そう思いながら睨み返していると、男は私に何かを言う事を諦めたのか、ポケットから携帯を取り出してどこかに電話し始めた。

「・・・もしもし、〇〇不動産ですか？そちらでお借りした××マンションの305の部屋について少し伺いたい事があるのですが、担当者はいらっしゃいますか？」

なるほど！！

不動産と言う手があったか！

思わず手のひらをぽんつと叩きたくなったが、じろりと睨まれたのでやめておいた。

男は、不動産の人と何やら電話でやり取りをしていたが、私の方まで話は聞こえてこなかったのととりあえずここは男に任せた。

「あーあ・・・。引越し早々なんだかついてない・・・。せっかく念願の一人暮らしが出来ると思ったのに・・・」

溜息をついて窓の外を眺める。

後ろからは男が何やら文句を言っているようだが、何を話しているかは聞こえなかった。

「・・・湊・・・・・・・・」

ぽつりとつぶやいた名前。

もう今更関係ない。

そう思っても、思わず口からこぼれ落ちるくらい馴染んでいた名前。

逃げたのは私。

思わず目を伏せた。

「おい」

感傷に浸っている間にどうやら電話を終えたらしい男が私に声をかけた。

その声に振り向いて見ると、眉間にしわが寄っている。

・・・この人は、常に皺を寄せていないと人の顔がみれないのだろうか。

本気でそう思うくらい。初めてあった時から眉間にしわが寄っていた。

「今から不動産の奴がくる。とにかく一度部屋に戻るぞ」

なんで、そんな事あんたに命令されなきゃいけないのよ！

と思うが、電話で連絡を取ってもらったので口には出さなかった。

「はぁ・・・。なんで、俺がこんな目に・・・」

部屋に帰るまでにぽつりとつぶやいた一言が私の耳にも入ってきた。そんな事は私だって思っている。

新しいスタートを切る為に、一人暮らしをしようと思ったのにいきなりこれはないだろう。

2人して溜息をつきながら部屋へ戻った。

気まずい……。

お互い部屋に入った方がいいが、会話をするのもなく無言。

こんな重い空気の中で、一体相手は何を考えているんだろう。

ちらりと、後ろを振り向けば男は腕を組んで壁にもたれかかっている。

しかし、私の視線に気づいたのか、バチツと目が合ってしまった。

「あ……あの……」

初っ端から怒鳴りあいが始まった為か、何を言っているのかわからない。

口を開いた方がいいが全くその後言葉が続かなかった。

もじもじしている私に呆れたのか、男もため息をつく私から視線を外した。

なんだか、さっきよりさらに空気が重い。

とにかく、この空気をなんとかさせたいが自分ではどうしようもなく、早く不動産の人が来ることを願った。

その時、願いが通じたのか玄関の方からチャイムの音が聞こえた。

「来た!!」

私は、男の前を通り過ぎると走って玄関までいき勢いよく扉を開けた。

「お世話になりまーす! ●●引っ越しセンターでーす!!」

扉を開けるとそこには元気のいいお兄さんが2人帽子をとりながら挨拶をする。

2人には申し訳ないのだが、待っていた人とは違ったことに思わず肩を落とした。

だけど、そんなことは2人にはわからず、とびきりの笑顔を私に向ける。

「お待たせしました。早速、荷物を運んじゃいますね！指示をお願いします」

明るい笑顔で次々としゃべるお兄さんにひきつった笑みで私は答えた。

「あー……。ちょっと荷物運ぶの待ってもらってもいいですか？」

そう言うとお兄さんの笑顔が少し影を落とした。

「……。何かありましたか？申し訳ないんですが、こっちも次の予定が入ってるんですが……」

本当に申し訳なさそうに言うお兄さんに私も心が痛む。

だけど、この人に今の状況を説明してもしようがないだろう。思っていたら、後ろから男の声が聞こえた。

「……。奥の部屋が空いてる。そこに運んでもらえばいいだろう」

私の後ろに立った男の言葉にお兄さんも再び笑顔になった。

「わかりました。じゃあ、奥の部屋に運びますね！奥さんもそれでよろしいですか？」

・・・奥さん？

お兄さんの言葉に思わず凍りついてしまった。

「・・・おい」

男に声をかけられハツとすると、よろしくお願いしますとお兄さんに頭を下げた。

お、奥さん！？

・・・結婚もしてないのに！！

「とりあえず荷物を運んでもらった方がいいだろう。それとも余計だったか？」

続けて聞こえる男の声に、後ろを振り向いた。

「・・・いいえ。実家に荷物を送られても困りますから助かります・・・」

なんとか、冷静を装ってそう答えたが顔が赤くなっているのはバレているのだろう。

ため息をひとつつくと男は、一言「そうか」と言うと奥へと戻って行った。

そんな私たちのやり取りなど知らない引っ越しのお兄さんたちは、元気よく荷物を次から次に奥の部屋へと運んで行く。

私の荷物はあつという間に奥の部屋へと詰め込まれてしまった。

「これで荷物は全部ですね。では、ここへサインをお願いします！」

渡された書類に目を通し、私のサインを書きそれを渡すとお兄さんたちは笑顔で帰って行った。

「……随分荷物が少ないんだな」

リビングに戻ると男が私に話しかけて来た。
無理もない。

私の荷物は、一人暮らしをこれからしようという荷物の量ではなかった。

「……すべて心機一転して家具も買い揃えようと思っていたので……」

何を言っているんだろう？

こんな事この人に言ったってしょうがないのに……。
ふと、目を伏せると、男はそれ以上何も聞かなかった。

結局、その話はそのままになり、会話もなく不動産の人が訪れてくるのを待った。

荷物が少ない……。

実家にはたくさん荷物があつた。

私のベットに机。チェストに鏡台。

でも、私はすべてを置いてきた。

少しでも忘れたかった。

家に置いてあるものを見ていると嫌でも思い出してしまいそうだったから。

だけど、たったひとつどうしても置いて置くことが出来ない物があった。

そっと、荷物を置いてある部屋に入り、それを手に取った。

「……湊。ごめんね……」

手の中におさまっている者はジュエリーケース。
そして、その中に入っている物は……。

コンコン。

部屋の扉は開けっぱなしになっていた。
その扉をわざわざノックしたのだろう。

「……不動産の担当者が来た」

一言そう言うと、男はリビングの方へ戻って行った。

私も手の中にあるジュエリーケースを段ボールに戻すと深呼吸をして
気持ちを切り替え、リビングへと向かった。

3

「いやあ、遅くなってすみません」

全く悪びれる態度ではなく口先だけの言葉だと私でもわかる。

しかし、今はそれを咎める前にもっと違うところの話が聞きたかった。

それは、男も同じだったのだろう。

「・・・それで、どういう事ですか？」

リビングに通された営業マンらしき人は、男に出されたお茶を飲みながら言った。

「どうも、手違いがあったようです」

手違い？

一体、どんな手違いがあればこんな事になるんだ!!

営業マンの態度とその言葉にだんだん腹が立ってきた。

「それはどういった手違いで？」

男もイライラしているのだろう。

少し、言葉が強いようだ。

「あ!その前に申し遅れました。私、こういう者です」

営業マンは空気が読めないのか?!

っていうか、それは営業マン失格だろう。

そう思い渡された名刺を見る。

「〇〇不動産 営業 村田 正春」

・・・頭ん中が春っぽいもんな。

うっかり、失礼な事を考えたのは状況を考慮して許してほしい。

「・・・それで、村田さん。一体、どういう事なんですか？」

男が、呆れたように同じ事を2度繰り返した。

「それが、うちで契約して下さった沼田さんと〇△不動産で契約した笹原さんの契約日が同日だったもので、どちらもまだ空き部屋だと思われていたそうです。お互いこちらの大家に確認をした際はまだ大丈夫と言う事だったので、両社とも契約を交わしたと。そこで、大家連絡をしたのですが、大家がちょうど仕事で長期海外へ行かれています、両不動産に丸投げしていたそうです。不運が重なって、2重契約となってしまったということ・・・」

ということ・・・じゃない!!

一体どうしてくれるの!?

っていうか、どうしてそういう状況が起こってしまうの!?

あまりに村田の態度が悪く、その上呆れてしまう様な理由に怒りもピークだった。

「一体どうしてくれんのよ!!」

うっかり、怒鳴ってしまった。

村田は驚いた顔を一瞬したが、またすぐにへらへらとした表情に戻った。

「いやあ、本当に申し訳ありませんが、この時期でしょう? 空き部

屋が少なく今すぐに引っ越されるようでしたら家賃が多少上がってしまうのですが、よろしいですかね？」

なにい！？

家賃が上がる？

そんなの無理に決まってる！

ちらりと男を見ると男も腕を組んで考えていた。

「・・・補償はないんですか？こちらは正式に家を借りているんですから、訴えてもいいんですよ？」

男が村田にそういうと村田のへらへらした顔が急に真面目なものとなった。

「もちろん、補償は致します。引越し代、その他引越しに伴う費用はこちらで出させて頂きます。ただ、家賃となりますと、月々払って頂くものですから補償はできません。それに、今の時期ですと引越し業者が一番忙しくすぐにお引越しと言う事もなかなかできないのですが・・・」

なんだ・・・村田、はつきり喋れるんじゃないか。
くそ。甘く見られてたってことか。

「・・・わかりました。補償うんぬんは後日こちらから連絡しますが、部屋はすぐに用意してもらえるんですよね？」

男が少し強めに言うと、村田はすぐに用意すると約束した。

「じゃあ、ちょっと待っていてもらえますか？」

村田にそういうと、男は私の方を向きちょっと、と隣りの部屋へ手招きした。

「・・・なんですか？」

一体なんなんだ。

早く違う部屋を借りて出て行ってほしい。

「どちらが出て行く？」

は？

あんなに、補償やら、ちがう部屋の事を聞いていたから、てっきり男が出て行くものだと思っていたが・・・。

「私は、出て行きません。これ以上の家賃は払えませんが、会社からも通える距離をわざわざ探したんですから」

強気に言う男は眉を寄せた。

「・・・そんな事は俺だって一緒だ。通勤に便利な上、立地も部屋もやっとなりに行った所を見つけたんだ」

「・・・そんな事言われても・・・。
とにかくにも一向に平行線の話し合いにお互い妥協をしない。」

「・・・補償とか聞いていたじゃないですか。あなたが出ていくつもりだったんじゃないんですか？」

「いや、さすがに補償もない中、女性を追い出すのは心苦しいと思って聞いただけだ」

つまり、私が出て行く事前提で話していたと言う事か？

「勝手な事言わないで下さい！そっちが出ていけばいいでしょう！
？男の人だし、いい年なんだからお金くらい持つてるでしょう！！」

あまりに頭にきて、いつもは言わない失礼なことまでズバズバ言っ
てしまった。

「……金はあるが、俺はここが気に入っているんだ。ここを見
つけるまでどれだけ部屋を探したと思ってるんだ！」

そんな事私だって同じだ！

「お金があるなら、もっといいところにだって住めるじゃないです
か！！」

お互いが一步も譲らず、デジャブでも見ている様な感覚に陥った。
いや、デジャブではない……。この家に来た時とほぼ同じような
状態なんだ。

「まあまあ、お2人とも落ち着いて下さい。そんなに大声を出して
いたらご近所にご迷惑ですから」

再びへらへらした顔に戻っている村田が私達の間に入ってきた。
……というか、いつの間に部屋に入ってきたんだ。

「……はあ……」

男が腰に手をあて溜息をついた。

「このまま言っても話は平行線だな」

そんな事さっきから思っていた事だ。

だが、イライラがおさまらない私は何も答えなかった。
そこに再び空気が読めない村田がポン！と手を叩いた。
・・・一体、いつの人間だ。お前は・・・。

「じゃあこうしたらどうでしょう!？」

村田が話始めた内容に私の眉間にしわが増えていく。
ちらりと隣りを見れば隣りも同じような顔をしていた。

「では、俺はこっちの部屋を使う」

無表情に話す男に私は答える。

「わかりました。では私はここの部屋を使わせてもらいます」

お互い、にこやかな雰囲気など皆無である。

先程、馬鹿村田（あまりにむかつくのでそう呼ぶ事にした）が提案した内容はこうだ。

とりあえず、ここに似た物件があるかどうか探してみます。

と言うや否や携帯をとりだして電話を始めた。

ぶつぶつ何か言ってるなーと思うと携帯をポケットにしまい、にっこりとした顔でこういった。

「喜んでください！お2人とも！！」

瞬間殴ってやろうかと思ったが、とりあえず馬鹿村田の話をきいた。

「今、事務所に電話したら、この同じマンションの6階に空きが出る予定なんです！！」

ほお！馬鹿村田にしては上出来な情報だ！と思ったが、ふと引っ掛かる事がひとつ。

「予定？」

思わず口にだすと、馬鹿村田はへらへらした顔で、

「そうなんです！5月のGWに引っ越されるそうです！」

・・・GW？

今、3月の終わりですよ？

私の疑問は男が代弁してくれた。

「その間どうしろと？」

「はい！そこでなんですが、その間にどちらかが6階に移るか話しか合って頂ければいいんじゃないでしょうか？」

馬鹿か。いや、やっぱり馬鹿だ。

「・・・だから、その間私たちの住む所はどうすればいいんですか？」

また、いらったときたので強めの言葉になった。

「そこなんです！そこで、1か月ちよつとの間お2人でルームシェアを行って頂くと言うのはどうでしょう？1か月ちよつとで違うところに移られるのも大変でしょうから！」

どうだ！いい案だろう！

と言わんばかりの得意げな顔をした馬鹿村田にはもう溜息しかでない。

初めて会った男と、しかも、全く相性が合わない男とルームシェア？冗談じゃない！！

男だってそうだろうと思い、隣りを振り返ると、男は腕を組み何やら考え込んでいた。

「……まさか……?」

「……まあ、効率的にはそれが一番かもしれない」

ぽつりとつぶやく男に私は失神寸前だった。

そうこうして、結局、馬鹿村田と男があれよあれよと話をすすめて、私は男とルームシェアをする事となったのだ。

「おい」

男に呼ばれてハッとした。

うっかり、改めて経緯を思い返していたら、意識がどこかに飛んでしまっていたようだ。

「なんですか?」

慌てて返事をする。

「これからの事を話し合わなければいけないだろう。荷物をとりあえず片付けたらリビングに来てくれ」

そういうと男は自分の部屋へと入って行った。

私は私で荷物を置いていた部屋へ戻ってそれらを眺めてみると思わずため息が出てしまった。

「もう、私には戻るところがないんだから、1カ月我慢しなきゃ・・・」

ぺしん!と両頬をたたくと気合を入れなおし、まずはこの部屋の窓を開けることから始めた。

「そうよ!窓も開けないで荷物に囲まれているから気分が暗くなるんだわ!まずは空気の入れ替え入れ替え!!」

一人暮らしをすると一人事が多くなるって本当だった。

いや・・・。正確には一人暮らしではないけど・・・。

窓を開けると、いい風が頬に当たって部屋の中へと入って行った。

「よし!とにかくこの荷物を片づけなくちゃ!」

いくら荷物が少ないと言っても、このままにしておくには邪魔になる。

段ボールに詰められている服を備え付けのクローゼットに掛けていく。

ふと、すでに開いている段ボールから見えるジュエリーケースが目が止まった。

「・・・これはどこに置こう・・・」

ペタンとその段ボールの前に座ると、ジュエリーケースを膝の上に載せてケースを開けた。

中にはネックレス、ピアス、ブローチなどが所狭しと並んでいる。その中でも、大事にしまわれたビロードのケースを取り上げると、そっと蓋を開けた。

そこには小さいながらもダイヤの着いた指輪が収まっていた。
捨てたくても、捨てられない。

返したくても返すことも出来なかったその指輪。

涙はもうとつくの昔に枯れ果てた。今では、これを見るだけでは泣かなくなった。

「……婚約してるのか？」

後ろからいきなり男の声が聞こえ驚いてそちらを振り向くと、
またもやドアにもたれかかりながらこちらを見下ろしていた。

「……ノックぐらいしてください」

そう言いながら蓋を閉め段ボールに再び詰め込めば、キッと男を睨む。

「ノックはした。声もかけた。いつまでも振られた男からの指輪なんて眺めてるから聞こえなかったんだろう」

「なっ！！あなたには関係ないじゃありませんか！！大体、どうして私が振られたって決めつけるんですか！！」

男の言葉にカッとなり思わず言い返した。

「はぁ……。未練たらしくそんなものを持っている奴は振られた奴だ。そもそも、そんな事俺にはどうでもいい」

男のため息混じりの言葉に更に頭に来て言い返す。

「未練たらしく持っているんじゃない！こっちだって困って

いるんです！っていうか、あなたには関係ないわ！！」

そう言うと、男をがもたれていたドアを閉めようとドアノブに手を掛けた。

が、男に押さえられそれが叶わなかった。

「・・・っ！！なんですか！！」

「これからの事を話し合うとさっき言っただろう。早く来い」

そう言うと、男は押さえていた手をどけてさっさとリビングへ行っ
てしまった。

男の態度に腹立たしさは抱えていたが、さっさと今後の事を話して
無関心を決めようとしぶしぶりビングへと足を運んだのだった。

「……とりあえず自己紹介をしておく」

そう言って男は名刺を取り出して、私の前へと置いた。

「……え」

思わずこぼれた言葉は男の言葉によって消された。

「沼田 聡。^{ぬまた さとし} 28だ。……やっと、手がけていた仕事がひと段落
ついて引越しをしたのにまさかこんな事になるとは思わなかった。
……何か聞いておきたい事はあるか？」

男が独り言を混ぜながらそう問いかけてきたので私も慌てて自己紹介をした。

「……笹原 結衣^{ささはら ゆい}です。22です……。この春から社会人になる
ので、こちらに越してきました。こんな事になるなんて、想像もし
てなかったですけど……」

本当に上京してきていきなりこんな事になるなんて思ってみなかつた。

そう思うと、何だか先行きが不安になってきた。

「……そうか。いきなり怒鳴ってすまなかった。また、見ず知ら
ずの女が因縁をつけにきたのかと思って……」

そういうと、男は申し訳なさそうに頭を下げた。

まさかこんな風に謝ってくれるなんて思ってもみなかったので、思わず目を見開いて男を見てしまった。

・・・はつきりと男の顔を見たのはこれが初めてかもしれない・・・。

今までは何が起こっているのかを理解するのに男の顔なんてまともに見てなかったから・・・。

だから、気づかなかった。

目の前に座っている男が世間では『イケメン』の部類に入ってしまった男だっことに。

「・・・モテそうですね・・・」

うっかり口が滑ってしまった。

「・・・そりゃ、どうも・・・」

男の呆れた様な返事にハツとして思わず口を手で覆ってしまった。

「・・・すみません。つい口を滑らせてしまいました」

言うつもりはなかった言葉をしゃべった事で思わず頭を下げた。

「ぷ！そんな事を言われたのは初めてだ」

頭の上から聞こえた笑みに頭をあげると男が優しい笑顔で笑っていた。

「もてそうだと言われる事はよくあるが、まさかそれが口が滑ったと言われた事はなかった」

そうだった……。男の調子にうつかり流されて謝ってしまったが、べつにもてそうといって悪い事なんてなかったのに……。

なんだか謝り損だった気がしておもわず頬が膨れる。

「……それで、これからどうするんですか？」

くすくすと笑っている男に少し怒った感じでそう投げかけると男は笑うのをやめて話し初めた。

「……そうだな。とりあえず、約1か月一緒に住む事になるんだ。ある程度、お互いにルールを決めるべきだな」

1か月……。その期間に思わず溜息をついてしまう。

それでも、男との言う事に私も頷く。

「……そうですね」

「君は見たところ、荷物が少ないようだけど、家電や家具はこれから揃えるつもりだったんだろう？それなら、俺の持っているものを使ってくれても構わない。その代わり、新しい住居には君が移ってくれ。そうすれば、俺は大きな家具や家電を動かさなくても済むし、君も俺がいた部屋に住まなくて済むだろう？」

たしかに……。

私は全てを一新するつもりだったからまだ大きな荷物はないし、家電なんかを借りれるのは助かる……。

でも、そうしたらなんだか私が居候みたいになりそうな気も……。でも……。

「……わかりました。それで構いません。ただし、それまでの間

は、ここは私の部屋でもあるので、私が今使っている部屋に勝手に入ったりする事はやめて下さい。それから、次に新しい部屋へ移動するときには荷物を運ぶのを手伝ってもらえますか？もう、引越しを頼む余裕ありませんので」

うん。これくらいしてくれてもいいと思う。こっちだってただで引越すなんて冗談じゃないんだから。

「・・・いいだろう。お互い部屋へは立ち入らない事にしよう。荷物を運ぶことも休日であれば可能だ。家事などは自分が使った後はきちんと片付けます。そのままにしておくなどはやめてくれ。それから、一緒に住んでいる間は誰かを招く事もしないようにしてくれ。もちろん、俺も連れてくる事などしない。他に何かあればその都度お互いに確認する事にしよう。それでいいか？」

男が並べ立てる条件に特に不都合なこともないので頷いておいた。

「・・・では、さっきの不動産に君が6階の住居に住む事に決めた旨を伝えておく。ああ、食事などは各自適当にしよう。費用は全て折半にするからそのつもりで。じゃあ、俺は仕事があるから。何かあればノックしてくれ」

そういうと男はさっさと自分の部屋へと戻っていった。

私の意見など言う暇もなく決められた事に少し腹は立ったが、とにかく住む所がなくならなかった事に安堵しながら私も自分の部屋へと戻った。

こうして、私と沼田 聡との奇妙な共同生活が始まった・・・

o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3144w/>

私達の部屋

2011年10月31日15時14分発行